

Title	大垣方言における助詞・助動詞のアクセント：形態論の観点に基づく記述
Sub Title	The accents of particles and auxiliary verbs in the Ogaki dialect : a description based on the perspective of morphology
Author	吉安, 良太(Yoshiyasu, Ryota)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.1 (2022. 12) ,p.125 (104)- 142 (87)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	屋名池誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 大垣方言における助詞・助動詞のアクセント

— 形態論の観点に基づく記述 —

吉安 良太

## 1. 従来の付属語アクセント記述における問題

助詞・助動詞（以下、付属語と総称）のアクセントについては、東京方言を中心として先賢による多くの研究がある。また、本稿が扱う岐阜県大垣方言に関しても、大正期の付属語アクセントについては、既に杉崎・植川（2003）による記述がある。

こうした従来の付属語アクセントの研究は、どのような要素を助詞・助動詞として認めるかについて、学校文法に依存しているものがほとんどである。しかしながら、学校文法での品詞分類には明確な基準が存在せず、形態論的には不正確と言わざるをえない部分が少なくない。例えば、〈-ズツ〉のように接尾辞として扱われるべき形態素や、〈-タリ〉のように動詞の一部（語尾）として扱われるべき形態素が、助詞に含まれてしまっている。その結果、従来の付属語アクセントの記述は、必要以上に複雑な様相を呈してきた。

そこで本稿は、どのような要素が助詞・助動詞として認められるのかを明確にした上で、現在岐阜県大垣市で話されている方言（以下、大垣方言<sup>1</sup>）における付属語のアクセントを、可能な限り簡潔に記述することを目標とする。

## 2. 記述の対象と方法

本稿が記述対象とする大垣方言は、東日本方言と西日本方言の境界地帯で行われており、「アクセントは東日本式、文法は西日本式」（杉崎・植川（2003）

pp.354-355)と言われるように、東西方言の特徴を併せ持つ方言である。同方言のアクセントは内輪東京式に分類され、アクセント核（下がり目）の有無とその位置のみが有意な体系である。また、東京方言と同じモーラカウティング・シラブルアクセントであるから、/ン/などの特殊拍はアクセント核を担わない。なお、本稿の記述は、筆者の個人語に基づいている。筆者（20代）は、大学進学までの18年間を岐阜県大垣市の旧城下町域で過ごした、大垣方言の母語話者である。

本稿においては、アクセントを含めた音形を示す場合、該当箇所をカタカナで表記してスラッシュで挟み、語境界にはスペースを入れた上で、アクセント核を「<sup>1</sup>」で示した。アクセント核のない語については、その末尾に「=」を付することで平板型である旨を明示した。また、アクセントを示さない場合、大垣方言は山括弧〈 〉、その標準語訳は丸括弧（ ）に入れて区別した。

### 3. 語としての助詞・助動詞

本稿における語とは、屋名池（2011）pp.99-100に示されている「〔語〕」である。すなわち、最小呼気段落<sup>2</sup>であり、かつアクセント単位でもあるような言語単位を語と呼ぶ。このようにして語を捉えると、同p.102が指摘する通り、学校文法において助詞・助動詞と呼ばれているものの中には、語として認めることのできないものが少なからず含まれていることになる<sup>3</sup>。しかし、助詞や助動詞などの品詞は語を分類したものである以上、助詞・助動詞は全て語でなければならない。したがって、以下では、語として認められるものだけを助詞・助動詞と呼び、学校文法において助詞・助動詞とされてきたものの語として認められない要素（接辞）とは、明確に区別するものとする。

具体例として、学校文法において副助詞とされている〈-ズツ〉は、名詞に付く接尾辞で、語ではない。名詞に〈-ズツ〉が付くと、下例のように、必ず〈名詞-ズツ〉全体で1アクセント単位、すなわち1語をなす。このとき、〈フツカ／ヒトリ／フタリ-〉と〈-ズツ〉はいずれも語を構成する形態素であるが、前者が単独で1語の名詞としても用いられうるのに対して、後者はそうではない。単独で用いることができず、直前の名詞と結びついて初めて1語を形成することのできる形態素、すなわち接尾辞である。

/フツカ= / + <-ズツ> → /フツカズ<sup>1</sup>ツ / (二日ずつ)  
/ヒト<sup>1</sup>リ / + <-ズツ> → /ヒトリズ<sup>1</sup>ツ / (一人ずつ)  
/フタリ<sup>1</sup> / + <-ズツ> → /フタリズ<sup>1</sup>ツ / (二人ずつ)

なお、<-ズツ>の付いた派生語は必ず/-ズ<sup>1</sup>ツ/というアクセントを持つため、\*/ズ<sup>1</sup>ツ/というアクセント単位、すなわち語が存在するかのように錯覚しそうになるが、/ヒトリズ<sup>1</sup>ツ/から\*/ヒトリ= /という平板型の形態素を取り出せないのと同様に、\*/ズ<sup>1</sup>ツ/だけを取り出すことはできない。/-ズ<sup>1</sup>ツ/というアクセントは、<フツカズツ>のような派生語が全体として持っているのであって、<-ズツ>が単独で持っているのではないのである<sup>4</sup>。

同じく語として認められない例として、学校文法において接続助詞とされる<-タリ>がある。/カ<sup>1</sup>イタリ / (書いたり) や /ウッタ<sup>1</sup>リ / (売ったり) の<-タリ>であるが、これらは全体で最小呼気段落かつ1アクセント単位をなしており、やはり<-タリ>は接尾辞(動詞の語尾)であって語ではない。屋名池(2011) pp.102-106が指摘する通り、学校文法における接続助詞および助動詞の中には、このように動詞に付く接辞や語尾として扱われるべきものが少なからず存在する。なお、大垣方言において動詞の接辞・語尾と認められる形態素については、吉安(2021b) pp.134-135の注3および注4を参照されたい。また、このような接辞・語尾が動詞全体のアクセントを決定する仕組みについては、吉安(2021a) pp.49-58や同(2021b) pp.144-143で論じた。

#### 4. 付属語アクセントの記述法

付属語のアクセントについては、①それ自身のアクセントと、②直前の語に対する付き方という、2種類の特徴を記述すれば十分である。

①については、自立語と同様に記述できる。例えば/カラ= /、/マ<sup>1</sup>デ /、/デシヨ<sup>1</sup>ー /のように、アクセント核の有無とその位置を示せば問題ない。なお、アクセントは語を単位として決まっている特徴であるから、容易に環境によって変わるものではない。例えば、/ウ<sup>1</sup>ミ マ<sup>1</sup>デ / (海まで)のように、起伏型の語に起伏型の付属語が付いた場合、付属語側の音の下降が聞き取りにくくなるが、本

稿では上野（2003）pp.65-66や屋名池（2011）p.101の考え方を採り、これを付属語側のアクセント核が弱化あるいは消失したものとは見なさない。

②について、本稿では和田（1969）に基づき、「順接」と「低接」の2種類があると考え。まず、順接は、「末尾の高さ（または、高さの変更）におとなしく順応する」（同p.151）付き方を指す。つまり、先行語が、語末拍の高い平板型の語であればそのまま高く、語末拍の低い頭高型・中高型の語であればそのまま低く、語末に下がり目のある尾高型の語であれば低く付くのである。例えば、格助詞〈ガ〉は、下に示すように順接である。なお、下例では、○（低）と●（高）を用いて、音高を模式的に2段階で表している。

平板型 / オカ = ガ = / ○●● (丘が)

頭高型 / ウ<sup>1</sup>ミ ガ = / ●○○ (海が)

尾高型 / ヤマ<sup>1</sup> ガ = / ○●○ (山が)

次に、低接は、「前部が平板型のと き わ ざ わ ざ 低 く さ が っ て 付 き、前部が起伏型ならそのまま低く付く」（同p.149）付き方を指す。本稿では下例のように、語頭にアンダーバー（　）を置くことで低接の付属語であることを示す。例えば、引用を表す格助詞〈ト〉は、過去形（タ形）の動詞に付くとき<sup>5</sup>、低接である。

平板型 / ウッタ = 　ト = / ○●●○ (売ったと)

起伏型 / カ<sup>1</sup>イタ 　ト = / ●○○○ (書いたと)

## 5. 名詞に付く助詞のアクセント

本章以降は、ここまでの議論を踏まえた上で、現代大垣方言における付属語のアクセントを記述していく。順序としては、最初に助詞について記述し、最後に助動詞について記述する。そのうち、助詞については、アクセント上の振る舞いの違いを考慮して、名詞に付く場合、文末の活用語（動詞・形容詞・助動詞・判定詞）に付く場合、その他の非文末形式に付く場合で章を分けることにする。なお、助詞連続は、助詞で終わっている節や句（非文末形式）に更に助詞が付いたものであるから、最後の場合に含まれる。

本章では、名詞に付く助詞のアクセントを記述する。結論を先に述べると、助詞は名詞に対して原則として順接するが、例外的に順接と低接の両方が可能なものもある。そこで、まずは5.1で原則通り順接する助詞を挙げ、続いて5.2で、例外的に低接も可能な助詞について論じたい。

### 5.1. 名詞に順接する助詞

先述の通り、助詞は原則として、名詞に対して順接する。このような助詞には、具体的に下掲のようなものがある。なお、便宜上、小分類（格助詞・連体助詞・準体助詞・係助詞・副助詞・接続助詞・終助詞）ごとに五十音順で挙げた。標準語にない助詞の意味については、注を参照されたい。また、併用される語形は、チルダ（～）で繋いで示した。

格助詞：/オ＝/、/ガ＝/、/カラ＝/、/ト＝<sup>6</sup>/、/デ＝/、/ニ＝/、/ヤ＝/、/ヨ<sup>7</sup>リ/

連体助詞：/ノ＝/

係助詞：/コ<sup>1</sup>ソ/、/ワ＝/

副助詞：/カ＝/、/カ<sup>1</sup>シャン/～/カ<sup>1</sup>シラン<sup>7</sup>/、/カ<sup>1</sup>モ/、/ダ<sup>1</sup>ライ/、  
 /サ<sup>1</sup>エ/、/ス<sup>1</sup>ラ/、/ダケ＝/～/ダ<sup>1</sup>ケ/、/タ<sup>1</sup>ラ/、/デ<sup>1</sup>モ/、/ト<sup>1</sup>カ/、  
 /ド<sup>1</sup>コロカ/、/ト<sup>1</sup>テ/、/ト<sup>1</sup>ワ/、/ナ<sup>1</sup>ド/、/ナ<sup>1</sup>リ/、/ナ<sup>1</sup>ンカ/、  
 /ナ<sup>1</sup>ンテ/、/ノ<sup>1</sup>ミ/、/バ<sup>1</sup>カリ/～/バッカ<sup>1</sup>/～/バッカ<sup>1</sup>シ/～  
 /バッカ<sup>1</sup>リ/、/ホド＝/～/ホ<sup>1</sup>ド/、/マ<sup>1</sup>デ/、/ミ<sup>1</sup>タイ/～/ミ<sup>1</sup>タ<sup>8</sup>/、  
 /ヤ<sup>1</sup>シャン/～/ヤ<sup>1</sup>シラン<sup>9</sup>/、/ヤ<sup>1</sup>ラ/

終助詞：/カ＝/、/ケ<sup>1</sup>ー<sup>10</sup>/、/サ＝/、/ナ＝/、/ネ＝/、/ヨ＝/

#### 5.1.1. 程度を表す副助詞〈グライ〉〈ダケ〉〈バカリ〉〈ホド〉

程度を表す上記4種の副助詞は、同形態の接尾辞が存在する点に留意する必要がある。例えば、名詞に〈グライ〉が付く際には、次のような2通りのアクセントがありうる。前者の〈グライ〉は副助詞であるが、後者の〈-グライ〉は、第3章の〈-ズツ〉と同様の理由で接尾辞である。

副助詞 /フ<sup>1</sup>ジサン<sup>1</sup>グ<sup>1</sup>ライ タカ<sup>1</sup>イ ヤマ<sup>1</sup>/ (富士山くらい高い山)

接尾辞 /フジサン<sup>1</sup>グ<sup>1</sup>ライ タカ<sup>1</sup>イ ヤマ<sup>1</sup>/ ( )

これは〈グライ〉だけでなく、他3種の副助詞〈ダケ〉〈バカリ〉<sup>11</sup>〈ホド〉にも当てはまる。ただし、接尾辞〈-バカリ〉〈-ホド〉は、数量を表す語について、おおよその数量を表すときに限って用いられる。

### 5.1.2. 連体助詞〈ノ〉

東京方言と同様、連体助詞〈ノ〉には例外的な振る舞いが見られる。〈ノ〉は基本的に順接であるが、尾高型の名詞に付く場合のみ、名詞をしばしば平板型に変える。例えば、尾高型名詞/ハナ<sup>1</sup>/ (花) に〈ノ〉を付した場合、原則通り順接すれば/ハナ<sup>1</sup>ノ=/であるが、実際には多く/ハナ=ノ=/となる。

## 5.2. 名詞に順接も低接もする助詞

下掲の助詞は、名詞に対して、順接も低接も可能である。よって、低接を示すアンダーバーに括弧を付して挙げた。例えば、〈大学へ〉は、/ダイガク=エ=/ (○●●●●) とも /ダイガク= \_エ=/ (○●●●○) とも発音される。

格助詞：/(\_)エ=/、/(\_)ト=<sup>12</sup> (引用)、/(\_)ツテ=/

係助詞：/(\_)モ=/、/(\_)シ<sup>1</sup>カ/

終助詞：/(\_)ヤ=<sup>13</sup>

ただし、低接する頻度はそれぞれ異なっており、〈ト〉〈ツテ〉〈シカ〉〈ヤ〉は低接することが多いが、〈エ〉〈モ〉は順接することが比較的多い。

## 6. 文に付く助詞のアクセント

本章では、文末で用いられうる形態の活用語に付く助詞のアクセントを記述する。文末で用いられうる形態とは、一例を挙げるならば、動詞であれば〈売る〉〈売った〉〈売らなんだ〉、形容詞であれば〈良い〉〈良かった〉〈良からう〉、助動詞であれば〈らしい〉〈でしょう〉、判定詞であれば〈や〉〈でした〉のような形態を指す。したがって、倒置や言いさしなどの特殊な場合を除けば文末では用いられないような形態、例えば〈売れば〉〈売りながら〉〈良くて〉のよう

なもの、ここに含まれない。このような形態に付く助詞のアクセントについては、次章で扱う。なお、毎度「文末で用いられうる形態の活用語に付く助詞」というのは長いので、以下では、これを単に「文<sup>14</sup>に付く助詞」と表現することにする。また、本章における活用語とは、動詞・形容詞・助動詞のうち活用を有するもの<sup>15</sup>、並びに判定詞を指す。よって、無活用動詞（学校文法における複合サ変動詞の語幹）、無活用形容詞（同じく形容動詞の語幹）、無活用形容詞型の助動詞（伝聞の〈ソー〉など）は含まれない。これらに直接付く付属語のアクセントは、名詞に付く場合のものと同じである。また、〈無活用動詞+スル〉〈無活用形容詞（無活用形容詞型助動詞を含む）+判定詞〉に助詞が付く場合のアクセントは、それぞれ有活用動詞や判定詞に助詞が付く場合のアクセントと同じである。

文に付く助詞は、原則として低接する。そこで、始めに6.1では文に付く助詞の一覧を示し、続いて6.2以降で、例外的に順接する場合について述べる。

### 6.1. 文に付く助詞一覧

大垣方言において、文に付く助詞には、下掲のようなものがある。なお、先述の通り、これらの助詞は文に対して原則として低接するので、例外的に順接の方が一般的なものを除いて、ここでは一律に低接の記号を付して示している。

格助詞：/\_ト=、/\_ツテ=、/\_ヨ<sup>1</sup>リ/

準体助詞：/\_ノ=~/\_ン=

係助詞：/\_シ<sup>1</sup>カ/

副助詞：/\_カ=、/\_カ<sup>1</sup>モ、/ダ<sup>1</sup>ライ、/ダケ=~/ダ<sup>1</sup>ケ、/\_タ<sup>1</sup>ラ、/\_ト<sup>1</sup>カ、/ド<sup>1</sup>コロカ、/\_ト<sup>1</sup>テ、/\_ト<sup>1</sup>ハ、/\_ナ<sup>1</sup>ド、/\_ナ<sup>1</sup>リ、/\_ナ<sup>1</sup>ンテ、/ノ<sup>1</sup>ミ、/バ<sup>1</sup>カリ~/バッカ<sup>1</sup>~/バッカ<sup>1</sup>シ~/バッカ<sup>1</sup>リ、/ホド=~/ホ<sup>1</sup>ド、/\_マ<sup>1</sup>デ、/\_ヤ<sup>1</sup>ラ/

接続助詞：/\_ケ<sup>1</sup>ド~/\_ケ<sup>1</sup>ドモ~/\_ケ<sup>1</sup>レドモ、/\_シ=、/\_デ=<sup>16</sup>、/\_ト=、/\_ナ<sup>1</sup>ラ、/\_ナ<sup>1</sup>ラバ、/\_ナ<sup>1</sup>リ=、/\_ニ=<sup>17</sup>、/\_ノ<sup>1</sup>デ、/\_ノ<sup>1</sup>ニ、/ママ=~/マンマ=、/モノノ=、/\_モ<sup>1</sup>ンデ/

終助詞：/\_エ=<sup>18</sup>、/\_カ=、/\_ガ<sup>1</sup>ナ<sup>19</sup>、/\_ガ<sup>1</sup>ヤ<sup>20</sup>、/\_ケ<sup>1</sup>ー<sup>21</sup>、/\_ゲ<sup>1</sup>ー<sup>22</sup>、/\_サ=、/\_ジャ=<sup>23</sup>、/\_ジャ<sup>1</sup>ワ~/\_ヤ<sup>1</sup>ワ<sup>24</sup>、/\_シャン=~/\_シラン=<sup>25</sup>、/\_ゾ=、/\_テ=<sup>26</sup>、/\_ナ=<sup>27</sup>、/\_ネ=、

/\_ノ=/<sup>28</sup>、/\_モ<sup>1</sup>ン/、/\_ヤ=/<sup>29</sup>、/\_ヨ=/<sub>1</sub>、/\_ワ=/<sub>1</sub>

## 6.2. 文に対して助詞が順接する組合せ

順接と低接の実際上の違いは、平板型の語に対して、高いまま付くか、低く下がって付くかという点である。したがって、以下では、文末に置かれる平板型の活用語と助詞の組合せのうち、助詞が高いまま付くようなものを挙げていくことになる。しかし、大垣方言には、そのような平板型の活用語が下掲の6種類<sup>30</sup>しかないので、説明上の便宜を図り、それぞれに次の通り呼称を決めておくことにする（各項末尾の括弧内は語形の具体例）。ただし、このうち〈-u〉で終わる基本形、〈-ta〉で終わる過去形、打消形、命令形が実際に平板型をとるのは、例外<sup>31</sup>を除き、アクセント素性<sup>32</sup>が-である場合に限られる。

基本形：語尾〈-u〉または〈-ansu〉<sup>33</sup>で終わる動詞。

例：/ウル=/(売る)、/ウランス=/(お売りになる)

過去形：語尾〈-ta〉または〈-anta〉<sup>34</sup>で終わる動詞。

例：/ウッタ=/(売った)、/ウランタ=/(お売りになった)

打消形：語尾〈-N〉で終わる動詞。

例：/ウラン=/(売らない)

志向形：語尾〈-o〉<sup>35</sup>で終わる動詞、および〈-karo〉で終わる形容詞。

例：/ウロ=/(売ろう)、/ヨカロ=/(良かろう)

命令形：語尾〈-e/o〉<sup>36</sup>で終わる動詞。

例：/ウレ=/(売れ)

判定詞：/ヤ=/<sub>1</sub> および/ジャ=/<sub>1</sub><sup>37</sup>。

### 6.2.1. 文+形式名詞的助詞

文に順接する助詞として、〈グライ〉〈ダケ〉〈ドコロカ〉〈ノミ〉〈バカリ〜バッカ〜バッカシ〜バッカリ〉〈ホド〉〈ママ〜マンマ〉〈モノノ〉の7つがある。これらは形式名詞的な性質を併せ持つことから、一般的な名詞と同様に、活用語に対して順接するものと考えられる。

一般的な名詞 /ウル= ミセ<sup>1</sup>/ (売る店)

形式名詞的助詞 /ウル=バッカ<sup>1</sup>リ/ (売るばかり)

ただし、過去形に付く場合に限っては、一般的な名詞も形式名詞的助詞も、稀に低接することがある<sup>38</sup>。

一般的な名詞 /ウッタ=ミセ<sup>1</sup>/ ~ /ウッタ=\_ミセ<sup>1</sup>/ (売った店)

形式名詞的助詞 /ウッタ=バッカ<sup>1</sup>リ/~ /ウッタ=\_バッカ<sup>1</sup>リ/  
(売ったばかり)

### 6.2.2. 文+間投助詞

文の後ろに〈サ〉〈ナ〉〈ネ〉のような間投助詞（本稿では終助詞の一種）が挿入される場合は、必ず順接する。

/ウッタ=ナ=ヒト<sup>1</sup>ガ=ナ=/ (売ったな、人がな)

### 6.2.3. 打消形+助詞（引用助詞以外）

引用助詞以外の助詞は、打消形に対して順接する。例えば、次の通りである。

/ウラン=カ=/ (売らないか)

/ウラン=モ<sup>1</sup>ンデ/ (売らないから)

なお、ここでの引用助詞とは、引用の格助詞〈ト〉およびその派生語を指す。具体的には〈ト〉〈ツテ〉〈タラ〉〈トカ〉〈トテ〉〈テ〉が該当し、これらは打消形に対して通常低接する。ただし、〈ツテ〉以外の引用助詞は順接も一応可能であり、特に〈ト〉は直後に動詞〈思う〉があるとき、/ウラン=ト=オモ<sup>1</sup>ウ/ (売らないと思う)のように、打消形に順接することが多い。なお、打消形に助詞が低接する場合には、特殊拍/ン/の直後に音の下降が実現することになる。このように、低接による音の下降は、アクセント核による音の下降と異なり、特殊拍の直後にも生じることができる。

#### 6.2.4. 基本形+助詞

基本形に付く助詞は、上述の形式名詞的助詞や間投助詞を除いて基本的に低接であるが、順接も可能であるものが多い。例えば、次のような例は、低接の方が頻度は高いものの、順接も普通に用いられる。

/ウル= \_デ=/ ~ /ウル=デ=/ (売るから)  
/ウル= \_ガ<sup>1</sup>ナ/ ~ /ウル=ガ<sup>1</sup>ナ/ (売るではないか)

ただし、先述の形式名詞的助詞と間投助詞のほか、〈ッテ〉〈ン〉〈エ〉〈ガヤ〉〈ケー〉〈ゲー〉〈シャン〜シラン〉〈テ〉のように、原則に従って低接しかできない助詞もある。

#### 6.2.5. 基本形／過去形／打消形／判定詞+終助詞〈ナ〉〈ネ〉

基本形・打消形に詠嘆を表す終助詞〈ナ〉〈ネ〉が付く場合は、必ず順接である。過去形・判定詞に付く場合は、順接も逆接も可能である。

/ウル= ナ=/ (売るな)  
/ウラン= ナ=/ (売らないな)  
/ウッタ= ナ=/~/ウッタ= \_ナ=/ (売ったな)  
/オマエ= ヤ= ナ=/~/オマエ= ヤ= \_ナ=/ (お前だな)

### 7. 非文末形式に付く助詞のアクセント

本章では、倒置や言いさしなどの特殊な場合を除いて文末に置かれられないような形式に助詞が付く場合のアクセントを記述する。非文末形式とは、具体的には、動詞のうち〈売りに〉〈売りながら〉〈売って〉のような形態、形容詞のうち〈良う〉〈良かったら〉のような形態、助動詞のうち〈らしくて〉のような形態、判定詞のうち〈で〉〈やったら〉のような形態、〈丘に〉〈売ってまで〉のように助詞で終わる句や節、ならびに副詞・連体詞・接続詞・感動詞（名詞や無活用形容詞から転じたものなど一部例外を除く）を含む。なお、助詞連続は、非文末形式に助詞が後続するパターンの一つであるから、その音調は本章の記述に従う。

非文末形式に対して、助詞は原則として低接する。ただし、例外として、間投助詞および終助詞〈ナ〉〈ネ〉は常に順接する。また、形式名詞の性質を持つ助詞に関して、次のような例外がある。非文末形式に〈グライ〉〈ドコロカ〉〈ノミ〉が付く場合と、〈ホド〉に助詞が付く場合は、順接することがある。

/ウリニ= \_ハ=/ (売りには)

/ウリニ= \_ダケ=/ (売りにだけ)

/ウリニ= \_グ<sup>1</sup>ライ/ ~ /ウリニ=グ<sup>1</sup>ライ/ (売りにくらい)

/ウリニ= \_ドコロカ/ ~ /ウリニ=ド<sup>1</sup>コロカ/ (売りにどころか)

/オマエ=ホド= \_ハ=/ ~ /オマエ=ホド=ハ=/ (お前ほどは)

なお、主として終助詞に付く助詞として〈一〉<sup>39</sup>〈イ〉〈エ〉があるが、これらも全て低接である。例えば、終助詞〈ナ〉に〈一〉が付くと/(\_)ナ= \_一=、終助詞〈ワ〉に〈イ〉が付くと/\_ワ= \_イ=、終助詞〈カ〉に〈エ〉が付くと/(\_)カ= \_エ=となる。

## 8. 判定詞のアクセント

判定詞は、無活用形容詞や名詞に付いて述語を形成するという点で、助動詞とは別の品詞である。しかし、学校文法における助動詞には判定詞が含まれているため、本稿ではここでアクセントを記述しておくことにする。

大垣方言における判定詞には、〈ヤ〉〈ジャ〉〈デス〉がある。まず、判定詞とその活用形のアクセントは、以下に示す通りである。

〈ヤ〉 : /デ=<sup>40</sup>、/ナ=<sup>40</sup>、/ナ<sup>1</sup>ラ/<sup>41</sup>、/ナ<sup>1</sup>ラバ、/ニ=<sup>40</sup>、/ヤ=<sup>40</sup>、  
/ヤ<sup>1</sup>ッタ、/ヤ<sup>1</sup>ッタラ、/ヤ<sup>1</sup>ッタリ、/ヤ<sup>1</sup>ッテ/

〈ジャ〉 : /ジャ=<sup>42</sup>

〈デス〉 : /デ<sup>1</sup>シタ、/デ<sup>1</sup>シテ、/デ<sup>1</sup>シタラ、/デ<sup>1</sup>シタリ、/デ<sup>1</sup>ス/

次に、前の語に対する判定詞の付き方であるが、判定詞のアクセント上の振る舞

いは基本的に助詞と同じであり、原則として名詞・無活用用言（無活用形容詞型の助動詞を含む）に対しては順接し、その他に対しては低接する。また、通常の助詞と同様に、形式名詞的性質の助詞〈ホド〉に付く場合は、/ホド=ヤ=/のように順接することがある。

/ガクセイ=ヤ=/ (学生だ)

/ユースュー=ナ=/ (優秀な)

/ウリニ=\_ヤ=/ (売りにだ)

/オマエ=ガ=\_ヤ=/ (お前がだ)

## 9. 助動詞のアクセント

現代大垣方言には、次のような助動詞が認められる。なお、/(\_)カ<sup>1</sup>モシレン=/ (かもしれない)のような準助動詞は、形態的には2語であるため、ここでは扱わない。また、下掲の助動詞のうち、それ自身が活用を持っているのは〈ラシー〉だけであるが、その活用および各活用形のアクセントは通常の形容詞と同じであるため、ここでは省略する。

/ソ<sup>1</sup>-/<sup>43</sup>、/デ<sup>1</sup>シヨ<sup>1</sup>/~/デ<sup>1</sup>シヨ<sup>1</sup>-~/デシヨ<sup>1</sup>-/、/ハズ=/、/ベ<sup>1</sup>キム、  
/ミ<sup>1</sup>タイム、/ヤ<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>/~/ヤ<sup>1</sup>ロー<sup>1</sup>-~/ヤロ<sup>1</sup>-/、/ヨ<sup>1</sup>-/、/ラシ<sup>1</sup>-/

前の語に対する助動詞の付き方は、助詞の付き方に準じる。したがって、原則として名詞や無活用用言（無活用形容詞型の助動詞を含む）や動詞打消形に対しては順接し、その他に対しては低接する。ただし、例外として、動詞基本形に〈ソー〉〈ハズ〉〈ベキ〉〈ヨー〉〈ラシー〉に付く場合は、常に順接する。また、動詞過去形に〈ソー〉〈ハズ〉〈ミタイ〉〈ヨー〉〈ラシー〉が付く場合、並びに判定詞に〈ソー〉が付く場合は、順接することがある。

/ガクセイ=ヤ<sup>1</sup>ロ/ (学生だろう)

/ユースュー=ヤ<sup>1</sup>ロ/ (優秀だろう)

/ウラン=ヤ<sup>1</sup>ロ/ (売らないだろう)

/ウル= \_ヤ<sup>1</sup>ロ/~ /ウル=ヤ<sup>1</sup>ロ/<sup>44</sup> (売るだろう)

/ウリニ= \_ヤ<sup>1</sup>ロ/ (売りにだろう)

/オマエ=ガ= \_ヤ<sup>1</sup>ロ/ (お前がだろう)

/ウル=ソ<sup>1</sup>ーヤ= / (売るそう)

/ウッタ=ソ<sup>1</sup>ーヤ= / ~ /ウッタ= \_ソ<sup>1</sup>ーヤ= / (売ったそう)

/ガクセイ=ヤ=ソ<sup>1</sup>ーヤ= / ~ /ガクセイ=ヤ= \_ソ<sup>1</sup>ーヤ= / (学生だそう)

## 10. まとめ

本稿では、現代大垣方言における助詞・助動詞のアクセントを記述した。結論としては、どのような形態素を助詞・助動詞と認めるのかを明確にすることで、直前の語に対する付属語の付き方を、次のような簡潔な法則で説明できることを示すことができた。

助詞および助動詞は、名詞・無活用用言・動詞打消形に対しては順接し、その他に対しては低接する。

当然ながら、既に述べたように、形式名詞的助詞や間投助詞など、この法則に沿わない例外も少数存在する。しかしながら、大垣方言においてこのように簡潔に付属語アクセントを記述することができたということは、従来複雑な分析や記述が行われてきた東京方言等においても、同様のことが可能である可能性を示唆するものである。今後は、このような点にも研究を広げつつ、現代大垣方言の記述を更に進めていきたい。

## 注

1 昭和期に合併した旧不破郡域の方言や、2006年に合併した旧上石津町および旧墨俣町の方言は含まないものとする。山口幸洋(1987)によれば、大垣市の旧市域と旧

- 不破郡域ではアクセントが異なっている。
- 2 屋名池 (2011) p.99の用語で、「これ以上分割すると聞き取りがむずかしくなり、不自然になってしまう限界まで、息継ぎを入れられる限り入れて区切ったときの長さ」を指す。実際の息継ぎは、複数の最小呼気段落からなる「呼気段落」ごとに行われるが、その始めには「句頭音調」(上野 (2003) p.62) が現れる。大垣方言の句頭音調は、典型的には名古屋方言に見られるような「遅上がり」の特徴を示すが、通常の発話においては、東京方言と同じく1拍目のみが低く発音される音調も併用されている。
- 3 この点については、木部 (1983) p.28にも同様の指摘がある。
- 4 一方で、(ゝヅ) が派生語全体のアクセントを決定する性質を持っていることも事実である。このような性質は多くの接尾辞が持っているものであり、本説明と矛盾するものではない。
- 5 このように、直前の語によって順接か低接かは変わりうる。なお、木部 (1983) p.29や清水 (2001) p.53は、低接によって生じる音の下降を、付属語の語頭にあるアクセント核の実現と見なすが、アクセントは語を単位として指定される特徴であり、直前の語の影響でアクセント核が現れたり消えたりするとは考え難いため、本稿ではこの考え方を採らない。また、仮にこの考え方を採った場合、動詞に付く /\_マ<sup>1</sup>デ/ のような、低接する起伏型の付属語について、1語に2つのアクセント核がある (\*<sup>1</sup>マ<sup>1</sup>デ) と見なすことになってしまうという問題が生じる。
- 6 引用以外の意味の〈ト〉。引用を表す〈ト〉は、順接も低接もする。
- 7 不確かなことを表す。例えば、/ホ<sup>1</sup>ンカ<sup>1</sup>シャン\_オ=カイニ=イッタ=/(本か何かを買いに行った) のように使う。なお、〈カシャン〉という形式には、文末において/ウル=\_カ=\_シャン=(売るのだろうか) のように標準語の「かしら」と同様の意味を表す用法もある (ただし、〈カシャン〉の使用に男女差はない) が、この場合については、終助詞〈カ〉に終助詞〈シャン〉が重ねられたものと見る。終助詞〈シャン〉については、注25を見よ。
- 8 〈ナンテ〉と同様の意味を表す。例えば、/ナンデ=ウ<sup>1</sup>ソミ<sup>1</sup>タイツ<sup>1</sup>イタ/(どうして嘘なんて吐いた) のように使う。
- 9 文末での用法も含めて注7の〈カシャン〉と同様であるが、こちらは疑問語や疑問語を含む名詞句に付く。例えば、/ダレ=ヤ<sup>1</sup>シャン\_カラ=キ<sup>1</sup>ータ/(誰かから聞いた) のように使う。
- 10 疑問を表す。〈カイ〉または〈カエ〉の母音融合 [ke:] に由来する。
- 11 後述するように、接尾辞〈-バカリ〉はおおよその数量を表す場合にのみ用いられ、限定の意味では常に副助詞〈バカリ〉が用いられる。一方で、〈バカリ〉に由来する〈バッカ〉〈バッカシ〉〈バッカリ〉は限定の意味しか持たないため、常に副助詞であり、接尾辞として用いられることはない。
- 12 引用を表す〈ト〉は低接することが多いが、1拍の名詞に付く場合に限り、順接が

普通である。また、〈ト〉の後ろに動詞〈ユー〉(言う)があるときには、〈ト〉が省略されたり、〈ト〉と〈ユー〉が融合して〈ツチュー〉になったりすることがある。そのような場合、〈ト〉は常に低接の特徴を残して省略あるいは融合され、/\_ユー/や/\_ツチュー/のように痕跡を残す。

- 13 相手の発話を受け、驚きや疑いの語気を伴って、文の一部(述語以外)を聞き返すときに用いられる。例えば、/アソコ=ノ=ムスメサン=ケッコン=シタ=\_ン=\_ヤ=\_ト=/ (あそこの娘さん、結婚したんだって) という発話を受けて、/アソコ=ノ=ムスメサン=\_ヤ=/ (あそこの娘さんがか) と聞き返すときに用いる。
- 14 〈行こうか〉〈良かったな〉のように、既に助詞が付いている文は含まないものとする。そのような文に更に助詞が付く場合のアクセントは、助詞で終わる節に更に助詞が付く場合と同じであるため、第7章を参照されたい。
- 15 屋名池(2011) pp.108-111に述べられているように、動詞には有活用動詞と無活用動詞、形容詞には有活用形容詞と無活用形容詞がある。また、助動詞の活用には、有活用形容詞型・無活用形容詞型・無変化型が認められる。本章で扱う対象は、それぞれうち有活用のものである。
- 16 理由を表す。標準語の「から」に相当。
- 17 〈ノニ〉と同じく、逆接確定条件を表す。また、勧誘・進言・依頼等の理由を表す。例えば、/ソンナ=モ<sup>1</sup>ンキタナ<sup>1</sup>イ<sup>1</sup>\_ニ=サワラントキャ<sup>1</sup>ー/ (そんなもの汚いから、触らない方がいい) のように用いる。後者の用法では、しばしば主節が倒置あるいは省略され、〈ニ〉が終助詞的に用いられることもある。
- 18 疑問語を含む文に用いられ、疑問を表す。例えば、/アノ=カミ=ドコ=エ=シマッタ=\_ン=\_ヤ<sup>1</sup>ッタ\_エ=/ (あの紙、どこに仕舞ったんだっけ) のように用いる。
- 19 同調を求めつつ、聞き手の気付いていない事柄を指摘するときに用いる。例えば、探しものをしている人に対して、/ココ=ニ=オット<sup>1</sup>ル\_ガ<sup>1</sup>ナ=/ (ここに落ちていないか) のように用いる。
- 20 注19の〈ガナ〉に同じ。
- 21 注10の〈ケー〉に同じ。
- 22 注19の〈ガナ〉に同じ。〈ガヤ〉の母音融合に由来すると考えられる。
- 23 疑問語を含む文に用いられ、自問を表す。最善策が分からず困惑しているときに用いられる。例えば、/ドッ=カラ=テ<sup>1</sup>ツケ<sup>1</sup>ル\_ジャ=/ (どこから手を付けたものか) のように用いる。
- 24 聞き手が取るべき行動を提案して促すときに用いられる。ただし、発話者はその行動に関して第三者でなくてはならない。例えば、/キョーグ<sup>1</sup>ライハヤメ=ニ=ネル=ヤ<sup>1</sup>ワ/ (今日くらい早めに寝てはどうか) のように用いる。
- 25 標準語の「かしら」と同様の意味。ただし、/ダレ=ガ=ク<sup>1</sup>ル\_シャン=/ (誰が来るのだろうか) のように活用語に直接付くのは、文中に疑問語がある場合のみである。多くは、終助詞〈カ〉〈ヤ〉を前に伴って〈カシャン〉〈ヤシャン〉の形で用い

- られる（注7および注9も見よ）。なお、このうち〈ヤシャン〉は、単独用法の場合と同じく、文中に疑問語がなければ使えない。
- 26 標準語の「ってば」のように、念押しするときに用いられる。例えば、/ユワレ<sup>1</sup>ンデ\_モ=ヤル=\_テ=/（言われなくてもやるってば）のように用いる。
- 27 詠嘆の〈ナ〉。禁止を表す〈ナ〉は伝統的に終助詞とされているが、最小呼気段落をなさないことや、命令を表す動詞の語尾〈-e/o〉と対立する形態素であることから、動詞の語尾〈-una〉と見るべきである。なお、この〈-una〉のアクセントは、吉安（2021a）p.52の⑨CV<sup>▽</sup>Cv<sup>▽</sup>cvcv型、同（2021b）p.143のパターン⑤・⑬に該当する。両論文の記述から漏れていたため、本注をもって補足する。
- 28 動詞の命令形に付き、催促の語気を表す。例えば、/ハ<sup>1</sup>ヨイケ=\_ノ=/（早く行けよ）のように用いる。
- 29 注23の〈ジャ〉に同じ。それに加え、/ドコ=イッタ=\_ヤ=ワカラ<sup>1</sup>ン/（どこに行ったか分からない）のように、疑問語を含む間接疑問節を導くこともある。
- 30 このうち、志向形および命令形は、あらゆる後続要素が低く付くため、そもそも平板型ではなく尾高型であると見るべき可能性がある。また、高年層においては－アクセント素性の過去形も同様の特徴を示す（筆者の祖母（70代・大垣方言母語話者）に対する調査に拠る）ため、高年層における－アクセント素性の過去形も、尾高型と見るべき可能性が示唆される（注38も見よ）。なお、志向形・命令形・－アクセント素性の過去形を尾高型と見る場合、それぞれの語尾は、吉安（2021a）p.52および同（2021b）p.143における次のアクセント型に該当する。志向形〈-o〉は⑩CV<sup>▽</sup>Cv<sup>▽</sup>cvcv型およびパターン⑥・⑬、命令形〈-e/o〉は⑨CV<sup>▽</sup>Cv<sup>▽</sup>cvcv型およびパターン⑤・⑬、過去形〈-ta〉は③CV<sup>▽</sup>CV<sup>▽</sup>cvcv型およびパターン④・⑪に該当する。
- 31 語幹が1拍の母音語幹動詞（一段動詞・変格動詞）の過去形は、+アクセント素性であっても平板型をとるものがある。具体的には、話し言葉において使用頻度の高い〈出る〉〈来る〉の過去形は、規則的に導かれる頭高型の/デ<sup>1</sup>タ、/ミ<sup>1</sup>タ、/キ<sup>1</sup>タ/と、不規則な平板型の/デタ=、/ミタ=、/キタ=が併用される（高年層はもっぱら平板型を使用）。一方で、使用頻度の低い〈得る〉〈経る〉などの過去形は、規則的に導かれる頭高型の/エ<sup>1</sup>タ、/ヘ<sup>1</sup>タ/などが普通である。また、本章には直接関係しないが、過去形のほかタラ形・タリ形・テ形においても同様の現象が見られる（例えば/デ<sup>1</sup>テ/~/デテ=、/ミ<sup>1</sup>テ/~/ミテ=、/キ<sup>1</sup>テ/~/キテ=、/エ<sup>1</sup>テ/、/ヘ<sup>1</sup>テ/。ただし、タリ形・テ形は過去形と異なり、高年層では使用頻度にかかわらず平板型が一般的）。これらの形態における上記の例外的アクセントについては、吉安（2021a）の記述から漏れていたため、本注をもって補足する。なお、高年層のアクセントについては、筆者の祖母（70代・大垣方言母語話者）をインフォーマントとする調査に拠る。
- 32 アクセント素性については、屋名池（2005b）および吉安（2021b）p.144を参照さ

りたい。動詞・形容詞のアクセント素性を簡単に判別する方法としては、学校文法における終止形が平板型であれば-アクセント素性、起伏型であれば+アクセント素性である。

- 33 尊敬語を作る語尾。ただし、聞き手ではなく、もっぱら第三者に対する敬意を表す。
- 34 尊敬語を作る〈-ansu〉(注33)の過去形に相当。
- 35 語尾〈-or〉の短呼形。〈-o〉が付いた形態は、動詞のアクセント素性にかかわらず平板型となる。ただし、注30に述べた通り、平板型ではなく尾高型と見るべき可能性もある。
- 36 子音語幹動詞(五段動詞)には〈-e〉、母音語幹動詞(一段動詞・サ変動詞)には〈-o〉が用いられる。なお、大垣方言では、語幹が2拍以上の母音語幹動詞は原則として全て+アクセント素性を持っているため、その命令形(例:/アケ<sup>1</sup>ヨ/(開ける))は平板型にならない。
- 37 現代大垣方言において、最も普通の判定詞は〈ヤ〉である。〈ジャ〉の使用は、強い口調で言う場合に限られる。
- 38 注30に述べた通り、高年層では低接の方が一般的である。高年層における-アクセント素性の過去形を尾高型と見るならば、本文中に挙げた低接の例は/ウッタ<sup>1</sup>ミセ<sup>1</sup>/、/ウッタ<sup>1</sup>バッカ<sup>1</sup>リ/と解釈でき、文に付く名詞は例外なく順接すると説明することが可能である。また、筆者のような若年層の体系においても、-アクセント素性の過去形が平板型と尾高型の間で揺れていると見れば、同様の説明が可能である。
- 39 終助詞の長呼化は、終助詞で終わる節や句に、この終助詞〈-〉が付いたものと見る。
- 40 /ナ= /に名詞が後続する場合、その名詞は順接するのが普通であるが、稀に低接することもある。なお、高年層では反対に、低接する方が一般的である。
- 41 「なら」について、屋名池(2005a) p.77は「接続助詞で、「だ」の変化形ではない」としているが、本稿では〈ナラ〉について、接続助詞と判定詞の両方を認める。接続助詞は名詞に直接付かないため、〈学生なら〉のように名詞に付いている〈ナラ〉は、接続助詞ではなく判定詞と見る必要がある。〈するなら〉〈良いなら〉などの〈ナラ〉は、従来どおり接続助詞と見る。
- 42 〈ジャ〉は〈ヤ〉を強めて言うときに用いられるが、現在の大垣方言では、他の活用形はまず用いられない。
- 43 伝聞を表す〈ソー〉。いわゆる連用形に付く〈-ソー〉は助動詞ではなく、動詞の語尾である。なお、杉崎・植川(2003) p.112にも掲載されている伝聞助動詞〈ゲナ〉は、既に高年層からも聞かれなくなっている。
- 44 後述する例外を除き、助動詞は一般的な助詞と同じく、動詞基本形に対して順接も低接も可能である。

## 参考文献

---

- 上野善道 (2003) 「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書店 pp.61-84
- 木部暢子 (1983) 「付属語のアクセントについて」『国語学』第134集 pp.23-42
- 清水めぐみ (2001) 「東京語の助詞のアクセント」『国語研究』(國學院大學国語研究会) 第64号 pp.32-63
- 杉崎好洋・植川千代 (2002) 『美濃大垣方言辞典』美濃民俗文化の会 (第2版 (2003年刊) による)
- 屋名池誠 (2005a) 「活用の捉え方」『新版日本語教育事典』大修館書店 pp.71-77
- 屋名池誠 (2005b) 「活用とアクセント」『新版日本語教育事典』大修館書店 pp.78-80
- 屋名池誠 (2011) 「文法論と語彙」『これからの語彙論』ひつじ書房 pp.97-112
- 山口幸洋 (1987) 「岐阜県下のアクセント—愛知・岐阜のアクセント (後編) —」『名古屋・方言研究会会報』第4号 pp.10-24
- 吉安良太 (2021a) 『大垣方言の形態音韻論的分析』慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻国文学分野修士論文 (慶應義塾大学学術情報リポジトリ (KOARA) にて公開予定)
- 吉安良太 (2021b) 「大垣方言における用言の形態音韻論的分析—音便形と補助用言のアクセントを中心に—」『藝文研究』(慶應義塾大学藝文学会) 第120号 pp.131-147
- 和田實 (1969) 「辞のアクセント」『国語研究』(國學院大學国語研究会) 第29号 pp.1-20 (徳川宗賢編 (1980) 『論集日本語研究2 アクセント』有精堂 pp.145-159に再録のものによる)